

北海道内における食虫植物の群落と生態 (第二報)

外山 雅 寛

(新篠津村立新篠津小学校)

(1) 本州産ときわめて異なる北海道産(新篠津産)ミミ
カキグサ類の生態について

結論を先に述べると新篠津産ミミカキグサ類に関する限り、元来は完全な沈水植物 (underwater plants) である。しかし、これらの植物について沈水植物として報告されたことは類例がないようである。

「水草研究会報」No.14号に筆者が示したムラサキミミカキグサの写真は、水が飽和状態になったみそ状 (のり状) 泥炭土の地面に地上葉を出している最大の群落地のものである。しかし、この地点は3年前までは水位が20 cmも高かった場所である。したがって3年前のムラサキミミカキグサの自生地は完全に水中下にあったことになり、むしろ本湿原においてはこれが正常な状態であったと解される。(当地の湿原の水位低下は排水事業による多くの排水こうに原因がある。) ムラサキミミカキグサがこの湿原に植生してよりずっと沈水状態であったことは、極めて興味ある事実である。開発の手がふれられていなかった数十年も以前にはもっともっと深い水中に自生していたのであろう。

本湿原は古くから著名な植物学者が数多く訪れたところであるのに、これまでムラサキミミカキグサとホザキノミミカキグサが確認

されなかったことが不思議にさえ思える。しかし、これらの植物が極小植物であること、今日まで沈水状態で地上に姿を見せなかったことを考え合わせるならばがてんがいく。水位の低下度から考察するとホザキノミミカキグサも植生が始まったころから沈水状態であったことはまちがいない、前報告にもあげたように部分的には両者の混生も見られる。

(2) 地下水位と排水こうの深さ及び距離との関係

泥炭地における地下水位と排水こうの深さ及び距離と

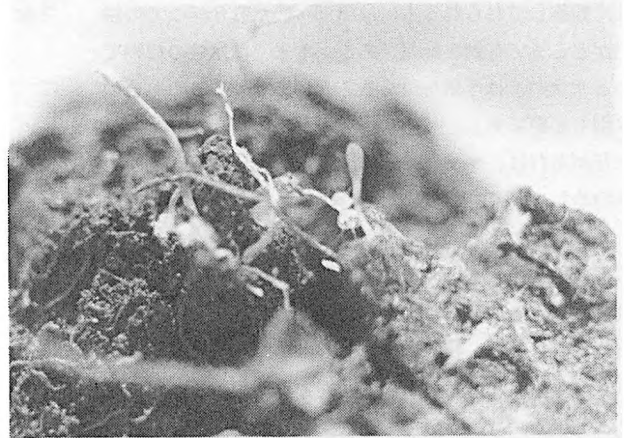


図1. ムラサキミミカキグサが自生するみそ状泥炭地
1983. 8. 12. (捕虫のうも示した)

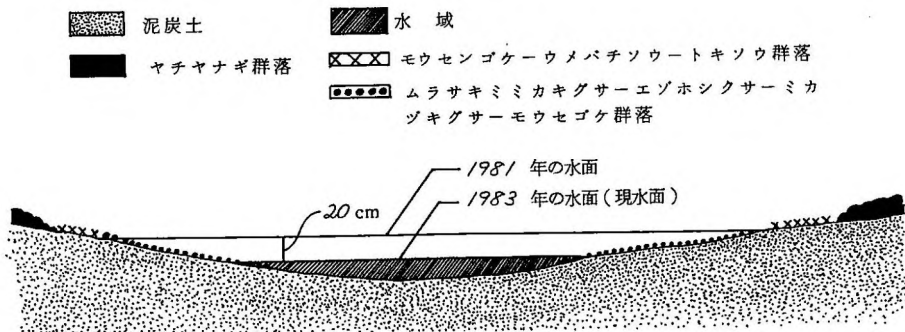


図2. ムラサキミミカキグサ大群落沼沢地の断面図

の関係については、北海道農試の実験結果が大いに参考になるので、本報文でとりあげることにした。ただ、この実験結果については気候・地形・泥炭の種類などを考慮したものではないが、おおよその関係をとらえることは、可能である。

表1 美唄高位泥炭地試験地における排水溝の距離及び深さと地下水位の関係

試験区別 排水溝の 距離 (m)	地下水位 (cm)	溝深に対し地下水位の 低下の割合 (%)
18	32.7	54.5
27	32.1	53.5
36	31.8	53.0
45	31.2	52.0
54	30.3	50.5
64	30.0	50.0
73	29.1	48.5
備考	上幅溝深 60 cm・大正 10—14 年、5 年平均 ・溝間中心点における 1 年間の地下水位を平均したもの	

(北海道農試調べ)

(3) 新篠津湿原の保護について

新篠津湿原の保護について学者の意見が報告書として提出されたのは、日本では四番目に古く早くからその学術的な価値の高さが知られていた。

わが国で初めて史蹟名勝天然記念物保存法(旧法)が公布されたのは、大正 8 年 4 月 10 日である。そして、新篠津湿原を天念記念物として保存すべきものという意見が出されたのは、法が公布された同年 9 月に作成された内務省嘱託理学士吉井義次報告であった。(美唄湿原と新篠津湿原の 2 つの保存を急務とすべき意見)

保存すべき場所は、篠津原野の一部で当時の報告書によると、石狩国石狩郡新篠津村、所有者は国有となっている。さらに保存する位置を明示するために☒印が付けられているが、この地点は現在の「新篠津湿原」の位置に合致している。

保存すべき理由を原文のまま引用すると次のようである。「位置ハ前者即チ美唄原野ノモノ程利便ノ地ナリト云フヲ得ズト雖モ上掲ノ何レノ道ヲトルモ札幌ヲ出デ途中一泊スレバ優ニ翌日視察ヲ遂ゲテ帰り得ベシ此ノ泥炭

ハ北海道庁五萬分ノ一地図ニハ沼沢トシテ示サル、部ニテ事実大小無数ノ池沼ヲ包括シ寧ロ沼中ニ水蘚群落ノ浮ベリト称スルヲ適当トスルガ如ク從ッテ此泥炭地ハ他ノモノト趣ヲ異ニシ其ノ植物生育ノ状ハ興味アルモノナリ……」(以下略)とし、8 月中旬本湿原より次の植物 33 種を報告している。エゾナミキ、オオヒルムシロ、サワシロギク、モウセンゴケ、ミズオトギリ、アギナシ、エゾゼキシショウ、ツボスミレ、ヒメシダ、サギスゲ、ウメバチソウ、アカネムグラ、ヒメシロネ、イヌツゲ、サワギキョウ、トキソウ、ミツガシワ、ヒオウギアヤメ、ホロムイツツジ、ミズトンボ、ニワホコリ、ネジバナ、ミズギボウシ、ヌマガヤ、エゾヒツジグサ、ホロムイソゲ、ツルコケモモ、ヤチスギラン、ヤチヤナギ、エゾミカヅキ、ホタルイ。

以上は少数の植物しか報告されていないが、限られた期間での観察であったことを考えると当時の植物がいかに豊富なものであったかがわかる。(この時ムラサキミミカキグサやホザキノミミカキグサは水位が高く完全な沈水状態であったことはまちがいない、発見もされなかった。)

吉井義次報告で保存の急務が力説された美唄湿原は既に失われ、同じように新篠津湿原も消滅寸前のところまできてしまっている。地質時代第三紀より始まって数千年を経て生成された当湿原を人工によって復元することは不可能なことである。

湿原の状況からみると、残された最後の手段は移植・人工培養・増殖の方法しかない。それにしても、ハルリンドウのようにわが国でまだ栽培法が確立されていない確実に消滅が予測されるものもある。人工培養は自然保護の立場からは最も消極的な方法であるがやむをえない実態にある。

＜参考文献及び引用文献＞

- 1) 外山雅寛：「北海道における食虫植物の群落と生態」水草研究会会報 No.14 (1983)
- 2) 小宮定志：「ミミカキグサも水草」水草研究会会報 No.10. (1982)
- 3) 吉井義次：「北海道ニ於ケル天然記念物」史蹟名勝天然記念物調査報告第四号 (1919)
- 4) 浦上啓太郎・市村三郎：「泥炭地の特性と其の農業」北海道農事試験場彙報第 60 号 (1937)